

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

柿本朝臣人麿の泊瀬部皇女・忍坂部皇子に 献れる歌

(巻第二 一九四番歌)

飛鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は
 下つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす
 か寄りかく寄り 靡かひし 嬌の命の
 たたなづく 柔膚すらを 剣刀 身に副へ寐ねば
 ぬばたまの 夜床も荒るらむ 「は云はく、あれなむ」
 そこ故に 慰めかねて けだしくも
 逢ふやと思ひて「は云はく、君もあふやと」
 玉垂の 越智の 大野の 朝露に
 玉裳はひづち 夕霧に 衣は沾れて
 草枕 旅宿かもする 逢はぬ君ゆゑ

天智天皇の子として生まれ、天武天皇の皇女(泊瀬部皇女)を妻とし、性格は温厚で気高く、雅やかと記されたその人(川島皇子)は、三十代で人生という旅を終えた。越智に葬られるその儀を待たため、妻は今、墓前の宿にいる。その心中を思い、柿本人麻呂は、皇女の兄である忍坂部皇子に代わってこの歌を詠んで献上した。

「飛ぶ鳥の明日香川の川上の美しい藻は、川下に流れ、からみあう。そのようにさまざまに寄りそい靡きあつた夫のあなたは、重ね合った柔らかな肌さえも、剣や太刀のように身にそえて寝ていないので、漆黒の暗闇の夜は寝



島根県益田市・島根県立万葉公園人麿呂展望広場・歌碑

床も荒れているでしょう。そう思うと私の心は慰めかねて、きつとお逢いできるだろうかと、越智の大野の朝の露に、美しい裳裾(すそ)は濡れ、夕べの霧に衣は濡れて、私は草を枕の旅やどりをすることだ。もう生きて逢えないあなたゆえに。」史実かどうかは定かではないが、『懐風藻』によれば川島皇子は、持統天皇からの強力な威圧を感じつつ、親友の大津皇子の謀反計画を朝廷に密告したという。寝るときも手離さず、そばで夫を守っていたのは、剣や太刀だった。守れた命ではなかったのか、生きている間に、何かもつと自分にできたのではなかったかと思うとき、人は苦しむ。どんなに想っても、生きて逢えないことが分かっているから、涙を流すしかないのだろうか。美しい藻が上の瀬で出逢い、川の流れて踊るように寄り添い、下の瀬で肌を重ね合った二人の日々であったのに。「愛しい君よ、また逢えますか。」

万葉集巻二は、恋の歌(相聞)と葬送儀礼の場で死者を哀悼する歌(挽歌)で構成されている。古の時代は、葬儀の時も歌があり音楽があった。宮廷歌人の柿本人麻呂は命を受けて、故人を偲ぶ歌を詠むはずの妻の兄(忍坂部皇子)に代わって、挽歌を詠んで献上したと考えられている。が、他の挽歌とは異なり、亡くなった皇子の功績ではなく、遺された「妻の想い」に寄り添って描いた。これには諸説ある。皇子が親友を密告したことで良くは思われなかったのか、人麻呂が泊瀬部皇女に寄せた親愛の情なのか、命の真意は・・・せめて、激流を生きたその人の妻でいること、待つ人がいることで、川島皇子は生き抜けたのだと思いたい。

この歌にある明日香川は、稲淵の山中に発し明日香を貫流して北上、大和川に注いでいる。また、「飛鳥の↓明日香」「ぬばたまの(実の) ↓黒」「玉垂れの↓おちる」「草枕↓旅」というように、それぞれが次の言葉を美しく導き出して歌を形成している。

「守れたはずの命」とならぬように備えたい。今この瞬間の決断に活かしたい。苦しみの分、誰かに伝えたい。そうして、人とつながって生きていたい。